

「主は聖霊によって宿り、十字架につけられ」

ガラテヤ3：8－14 使徒信条Ⅲ

堀田修一 9・18

今年度の当教会の標語は「礼拝と宣教を大切にする教会」です。礼拝の中で「主の祈り」の意味を噛み締め心から祈ることは、「宣教と成長」の前進につながる。また、礼拝の中で告白する「使徒信条」も意味を噛み締めて信仰告白をするとき、「宣教と成長」の前進となる。「主の祈り」で「御国が来ますように」との祈りは、この地においても「礼拝と宣教を大切にする教会」が建て上げられ、御国＝神の支配が拡大するようにとの祈りでもある。また、「使徒信条」を礼拝の中で告白するとき、三位一体の神と神の御業を宣教、伝道しているのである。礼拝の中に「使徒信条」と「主の祈り」があることは大きな恵みである！

本日は「使徒信条」の「主は聖霊によって宿り、乙女マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府にくだり」を説き明します。

1. 「主は聖霊によって宿り、乙女マリヤより生まれ」永遠の神の御子、永遠の神であり続けるお方が、聖霊なる神の全能の御力により、乙女マリヤの胎に罪のない赤子として宿られた。主は、真の神であると同時に真の人間とられた。ヨセフとマリヤの結婚によりお生まれになれば、アダム以来の罪の性質を宿す人間とされることになる。罪の性質のある人間は、全人類の罪を負い、身代わりに死ぬ救い主になる資格はない。そこで神は、御聖霊により結婚前の乙女マリヤの胎に救い主を宿すという人類史上例のない御業、全能の力で奇跡を起こし、罪のない救い主を罪人である私たち人間に与えられた。「ダビデの子（子孫）ヨセフよ、恐れ（事態を理解できない恐れであったらう）ずにマリヤをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っているのは聖霊によるのです」マタイ1：20。また、神である御子が、人の血と肉を持つまことの人間になられたことは、主御自身が33年の生涯で人として激しい試みを受け、不当な激しい苦しみを受けられ、私たちのつらい痛みを理解し、あわれみ、助ける大祭司（神の前で私たちのために執りなすお方）、救い主とされることにつながっている。「神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで人間の罪の宥め（人間の罪、悪への神の正しい怒りを主が十字架で受けられ、人間の罪の刑罰を負われたことによる宥め）がなされたのです。イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たち（私たちを含む）を助けることができるのです」ヘブル2：17，18。主は真の理解者！
2. 「ポンテオ・ピラトのもとで」。「ポンテオ・ピラト（皇帝テベリオによりAD26年にユダヤの総督に任命された。大祭司の任命権を持ち、住民への権限を持っていた）のもとで」。使徒信条がここで「ポンテオ・ピラト」と固有名詞を挙げることには理由があった。使徒信条が成立していった時代にはびこった異端は、キリストの受難が歴史的に事実であったことを否定しようとした。そこで、教会は、主の十字架が歴史的に事実だったことを強調するために、あえて実在の人物であった総督ピラトの名を挙げた。ただひとり罪のないお方、イエス・キリストが、地上の裁判官のもと、違法な手続きにより強行された裁判で死刑を宣告され、むごい十字架刑に処せられ死なれた。主イエスは、私たちの罪のために身代わりに刑罰を受けられ、私たちの救いの道が開かれた。感謝し神の御名をあがめます。

3. 「苦しみを受け」という言葉は、主がこの地上での御生涯のすべての時、特に生涯の終わりにおいて、全人類の罪に対する神の正しい怒りを体と魂に負われた事を示す。それは、この方が神に受け入れられる唯一のいけにえとして、御自身の激しい苦しみの十字架により私たちの体と魂を永遠の刑罰から解放し、私たちのために神の赦しと義（神との関係の回復）と永遠のいのちとを獲得して下さるためだった。「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられてものり返さず、苦しめられても、脅すことをせず（主は神でもあられたので敵対者をやっつけることは簡単にできたが）、正しくさばかれる方（御父）にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義（神のみこころ）のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒された（罪の赦し、心の癒し、みこころによる病の癒やし）」Ⅰペテロ2：24。主の苦しみによって救われた私たちの生涯においても、困難、試練、涙する日々があり、眠れない夜がある。それらは意味なく私たちを苦しめる運命的苦しみではなく、主の苦しみに与る主の弟子としての苦しみであり、主は、苦しみの中で、私達を決して見捨てられず、重荷を負い、終わりまで私たちと共におられる。
4. 「十字架につけられ」。主が、別の殺され方ではなく、十字架刑で私たち罪人の身代わりに死なれることは、聖書的に深い意味があった。その土台のみことばは→「キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者（私たちの罪への神の正しい怒り、のろいを身代わりに受ける者）となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。『木（十字架）にかけられる者はみな、のろわれている』と書いてあるからです」ガラテヤ3：13。旧約聖書の「律法（神と民との契約）ののろい」についてのみことば→「もしあなたの神、主の御声（みことば）に聞き従わず、私が今日あなたに命じる、主のすべての命令と掟を守り行わないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたをとらえる」申命記28：15。私たちの罪への神の正しい怒りは、神ののろいと理解するとき、私たちが、神の命令にそむくことは、本当に重い罪と実感させられる。私たち人間は、だれも神の命令、律法を完全に守ることができない。主、救い主がおられなければ絶望のみである。しかし、神は私たちを愛し、主イエスを十字架につけられ、私たちが受けるべき私たちの罪への神の聖なる怒り、呪いを主が十字架の刑で身代わりに受けられ、主を信じる私たちには、神の怒り、呪い、刑罰の代わりに神の愛、祝福、救いが与えられるのです。何という恵みでしょう！心から感謝し神を賛美します。主の祈り「御名が崇められますように」。
5. 「死んで葬られ」。この信仰告白は、主は、私たちの罪を負い、私たちの罪への神の正しい怒り、呪いから解放するために、本当に死なれ葬られた。御子の死の事実を告白するもの。主の死と葬りに私たちの罪の償いがかかっている。聖書の証言→「イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかつた。しかし、兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た」ヨハネ19：33, 34。「血と水が出て来た」とは、ゼカリヤ13：1「その日…罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる」の預言の成就。主の十字架の完全な死により真の救いの泉が開かれた。主は「私たちのために、この新しい生ける道（命の泉）を開かれた。ヘブル10：20。「葬られ」。「ヨセフは（主の）からだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた（葬った）」マタイ27：59, 60。「葬られた」は、主が本当に死なれた事実を示す。

6. 「よみにくだり」。陰府の原語：ハデス。陰府とは、悪人が死んだ後、もたえ苦しむ所。ルカ16：19-31。地獄とも同じようにも使われる。ルカ16：23。主が「よみにくだり」との告白は、私たちが最も激しい試みの時にも次の確信を持つため。私たちの主キリストは、十字架とそこに至るまで、御自身が肉体と魂において忍ばれた言い難い不安と苦痛と恐れにより、地獄のような不安と痛みから私たちを救い出してくださったと。私たちの救いのために、十字架で、陰府、地獄に下る究極の苦しみ、苦痛を味わって下さった。主の生涯が苦難であった事と主が「よみにくだり」の告白は重なり合っている。その最大の苦しみを示すみことば→「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになった（父と子の断絶）のですか」（マタイ27：46）。御父は愛する御子を私達罪人の身代わりに裁き、陰府、地獄に見捨てられた。その主への信仰により、滅んで当然の私達は裁き、陰府、滅びから救われ愛されているのです！今、あなたは苦しみの中におられますか。神は主の十字架の恵みにより、あなたを永遠に見捨てられません。